

『伊勢物語』の虚と実——『毛詩』を手がかりに——

山 本 登 朗

「芥川」の段としてよく知られている『伊勢物語』第六段は、男が盗んだ、つまりは連れ出した女が、摂津国芥川のほとりの蔵で鬼に食い殺されるという、きわめて虚構的、説話的な内容を語る本体部分と、その内容をすべて譬喩として解釈しなおし、実際は二条后・藤原高子や兄の基経、国経など歴史上実在の人物たちに関わる事実を語ったものであると述べる長大な補注部の二つの部分から成り立っている。この補注部については、後人の増補であるという説が江戸時代以来有力だったが、現在ではほぼ否定され、第六段は成立当初から意図的にこのような形に作られたと考えるのが通説になっている。同じように末尾に補注部を持つ章段は、第三段、第四段など、他にもいくつか見られるが、第六段の補注部は、それらと比べて量的にはるかに長大であり、また、本体部の「鬼」を兄の基経、国経の譬喩であるとして大胆に解釈し直すなど、質的にも他の補注部とは大きく異なっている。このような特異な形態と内容を持つ第六段は、いったいどのような人物によって、どのような着想から生み出されたのだろうか。

儒教の重要な書物である五経の一つとして重んじられた中国の『毛詩』（詩経）は、本来の素朴な歌謡（詩）に、「毛序」と呼ばれる儒教的解釈が加えられることによって、春秋時代の歴史的人物に関わった内容を語る儒教の経典へと大きく姿を変えている。そこでは、無名の人々の思いや行動を歌ったと思われる歌謡が、その内容を譬喩として強引に解釈する注釈を加えられることによって、歴史上の人物にまつわる教訓や風刺の詩に変貌しているが、その方法は、『伊勢物語』第六段の本体部分と補注部の関係にきわめてよく似ている。当時の日本の貴族達にとって、『毛詩』は、儒教の基本的な経典の一つとして、学ばねばならない重要な書物であった。上述のような、本来の「詩」と「毛序」の関係についても、当時の貴族達はよく知っていたと考えてよい。

もちろん言うまでもなく、『伊勢物語』の各章段がストーリーを語る物語であるのに対し、『毛詩』の本体部分である「詩」は歌謡であり、また『伊勢物語』の補注部が本体の後に付けられているのに対し、『毛詩』の「毛序」は序として詩の前に置かれている。さらに、『伊勢物語』第六段補注部の内容は、儒教の経典である『毛詩』と違って、けっして教訓や風刺とは考えら

れない内容を有している。このような相違もあり、前者が後者を単純に模倣したと考えることは困難であるが、それでもなお前述のような両者の類似は否定しがたく、『伊勢物語』第六段の作者は、『毛詩』から学び取った方法をここに応用して、『伊勢物語』第六段の世界を作り上げたのではないかと考えられるのである。

たとえば『伊勢物語』第三十九段にその名が記されている源順の周辺にいた学者たちの一人が、『伊勢物語』を現在の姿にまとめた、その最終段階の作者であった可能性は小さくないが、漢学者・儒学者であった彼等は当然、『毛詩』とその注（毛序）の関係をよく知っていたと考えられる。また、『伊勢物語』の作者の一人かとも考えられている紀貫之が書いた『古今和歌集』の仮名序は、『毛詩』の冒頭にある「大序」に記された文学理論に大きな影響を受けていることが知られている。あくまでも推測にすぎないが、いまあげた二人の人物やその周辺の人々が『伊勢物語』第六段の作者であった可能性は小さくないと考えられる。

上述のような『伊勢物語』第六段の方法は、鎌倉時代に成立した、いわゆる「伊勢物語古注」の方法ともよく似通っている。「伊勢物語古注」の方法は、第六段に学び、それを特殊な方向に発展させたものと言ってよい。

虚構と事実が本体部と補注部という形で二重写しのように構成されている、このような『伊勢物語』第六段は、必然的にその両者が重ね合わせられた形で享受されることになる。鎌倉時代から江戸時代に至る数多くの絵画作品では、この第六段が、高貴な身分の男性が高貴な姫君を背負って徒歩で（しかもしばしば裸足で）川の畔を逃げているという、虚実とりまぜた不思議な図柄となって描き出されており、その非現実的だが叙情的な図柄は、さまざまなパロディーが生み出されるほど、長く広く人々に愛され続けたのである。